

## 「ト思う」述語文の情報構造について

著者	小野 正樹
雑誌名	文藝言語研究. 言語篇
巻	38
ページ	57-70
発行年	2000-10-20
その他のタイトル	On the Information Structure of “to omou”
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/9853">http://hdl.handle.net/2241/9853</a>

## 「ト思う」述語文の情報構造について

小野正樹

【キーワード】 確認可能性・3つの時点・真偽判断・焦点化

### 1 研究目的

「ト思う」述語文は、話し手が思考内容を表明する表現形式である。

(1) 彼女がピアノを弾くと思います。

この文では一人称が思う主体であり、かつ話し手で、「彼女がピアノを弾きます」と断定するには十分な証拠を持っていないために、思考を行った結果の表明となっている。では、次の例はどうであろうか。

(2) 彼は彼女がピアノを弾くと思っています。

この例で思う主体は「彼」であり、話し手とは異なることから、二つの精神世界が認められるが、話し手は思考の主体である「彼」の思考結果を伝えるだけでなく、思考者の思考内容を偽とし、「彼は彼女がピアノを弾くと思っているが、実はそうではないのだ」という解釈も可能である。つまり、話し手は「彼女がピアノを弾かない」という新たな情報を所有しているわけである。このように本稿では、アスペクトや人称の異なる「ト思う」述語文をとりあげ、思考から言語化されるまでの情報構造を記述し、さらに談話における文機能を追究することを目的とする。

### 2 「ト思う」のアスペクト的性質—埋め込み節をとる動詞の体系から—

動詞「思う」の統語的特徴について述べたものは多いが、ここでは工藤(1995:44)を代表させておく。工藤は「日本語は、スル・シタ・シテイル・シテイタのパラグマティックな対立の中に、時間的なカテゴリーがある」とした上で、日本語の動詞をアスペクトの観点から、動態動詞(dynamic verb)と

静態動詞 (static verb) の2グループの他に、「思う」をはじめとして、思考・感情・知覚・感覚を表す動詞の一部は、行為を表す他の動詞のようなアスペクト的対立を認めないカテゴリーがあると述べている。例を挙げれば、(3)(4)のような一人称主体の文では、それぞれル形、テイル形とも成立するが、(5)の三人称主体の文ではル形は非文法的となる<sup>1</sup>。

- (3) 僕は彼女が故郷に帰ると思うよ。  
 (4) 僕は彼女が故郷に帰ると思っているよ。  
 (5)\*彼は彼女が故郷に帰ると思うよ。  
 (6) 彼は彼女が故郷に帰ると思っているよ。

「ト思う」のような精神活動を語彙的意味に持つ動詞では、主体が三人称の場合には、ル形を用いることができず、テイル形を用いなければならない制約が生じるが、この点を考慮して、工藤は新たなカテゴリーを立てたのである。

また、形態的に埋め込み節をとる動詞の中でも、「ト思う」は談話レベルにおいてアスペクト的特色がある。「ト思う」ではル形が自然であるのに対し、「ヲ見る」や「ト聞く」はル形に不自然さを感じるからである。

- (7)?僕は彼女が故郷に帰るのを見るよ。  
 (8)?僕は彼女が故郷に帰ると聞くよ。

埋め込み節をとる動詞の中で、ル形が成立するものには<sup>2</sup>、「ト感じる」および、その異種「ツテ感じがする」等が挙げられる。6節で詳細に述べるが、この特徴が「ト思う」述語文の発話時の話し手の心的態度を述べることを許し、こうした特徴は埋め込み節をとる動詞の中でも希少な述語と位置づけられる。

### 3 確認可能性

#### 3. 1. 「ト思う」の分類

埋め込み節に対して十分な証拠を持っていないこととは、埋め込み節の表わす出来事に対して確認ができていないことを意味している。確認可能性とは新情報・旧情報の対立、前提と主張の区別などの考慮する情報構造の分野で用いられる術語である (詳細は Chafe1994, 定延・熊谷・莉田1999)。この確認可

<sup>1</sup> 以下、記号 [\*] は筆者が日本語として非文法的で、[?] はそのコンテキストでは不自然だと判断していることを示す。なお、先行研究からの引用文については、その著者の判断である。

<sup>2</sup> ル形でも、繰り返しを含意する習慣読みは分析から外す。

能性を用いて「ト思う」述語文の情報構造を分析すると、確認が可能であっても、不可能であっても「ト思う」で表現できる。「ト思う」の機能に関する先駆的研究に、森山（1992）があるが、この確認可能性の点から改めて観察したい。

(9) あの辺りに停めたと思う。

(10) 日本の医療制度は間違っていると思う。

森山は(9)を不確実用法、(10)を主観明示用法とし、前者を「話し手自身が本来わからないものとしてとらえているのではなく、独断として話し手なりの認識を表す」、後者を「個人的な意見を述べるもの」と定義した。前者は「停めたかどうか」を確認すれば、「ト思う」述語文で述べられたことが真か偽か判断できるのに対し、(10)では「日本の医療制度は間違っている」ことは確認できるものではなく、あくまで個人的な主観を述べたものにすぎない。ここに両者の違いがあるが、この違いは「ト思う」の有無を観察しても、話し手の心的態度の異なりが読みとれる。すなわち、(9)と(11)では「ト思う」の有無で現実性が異なるのに対し、(12)は(10)と較べても現実性の違いは認められないからである。

(11) あの辺りに停めた。

(12) 日本の医療制度は間違っている。

また、不確実用法が「話し手なりの認識をあらわす」ものにしても、確認可能性の難易度からその性質は一律には定義できるものではない。例として埋め込み節の内容が、確認不可能な未来時の場合である。

(13) 5千年も経てば、人類は滅亡すると思う。

(11)と(13)の違いを、副詞「確か」との共起テストから観察したい<sup>3</sup>。

(14) 確かあの辺りに停めた。

(15) \*確か5千年も経てば、人類は滅亡すると思う。

このテストから確認可能性には出来事時が時間的制約として生じていることがわかるが、2つの時点、以下、出来事時をET、思考時をTPとすると、両者の関係は論理的には次の5つの可能性が挙げられる。

- i ETがTPに完全に先行する。
- ii ETがTPに先行するが、一部重なる。
- iii ETとTPが完全に一致する。

<sup>3</sup> 森山(1995)に「確か」は直接経験忘却タイプの副詞という指摘がある。

- iv ETがTPに後続するが一部重なる
- v ETがTPに完全に後続する。

この分類に本稿であげた例を当てはめると、「あの辺りに停めた」ことはTPよりも以前の*i*に実現している。しかし、思考者と「停めた」行為者が同一であることから、確認が可能である。そして、森山の分類では同類の不確实用法に当たる(13)は、「5千年も経てば」との条件句が表すように、思考時点よりも完全に未来のことなので、*v*の範疇だと考えられ、かつ、思考の主体には確認可能性が難度なものとなっている。また、*i*の中でも現在時から遠く離れば離れるほど確認可能性の点から見れば、難度なものとなる。一方、主観明示用法の(10)「日本の医療制度は間違っている」ことは思考時点と同一の*iii*だと考えられる。この思考が続く限りこの主観性が継続するからである。反対の言い方をすれば、思考が終われば主観性の表すことがらも終わるわけである。そして、これは思う主体の精神世界の中にあるもので、外部世界に存在しないものであるから、確認は不可能である。以上の分析をまとめると、以下のように整理できる。

時間の流れ	過去		現在時		未来
TPから見た距離	遠	近	一致	近	遠
確認可能性	難	易	不可	易	難
「ト思う」の用法(森山1992)	不確実		主観明示		不確実

〈表1〉時間の流れからみた確認可能性の難易性

この分類は、「ト思う」対象を確認可能性の点から見たものだが、*i*や*v*のように確認が難しいものほど、不確実性が増すことは予想できよう。

### 3. 2. 確認可能な主体の順列について

埋め込み節をとる動詞で、その埋め込み内容が、確認可能な典型的動詞は「ヲ見る」である。

(16) 僕は彼女がピアノを弾いているのを見た。

「ヲ見る」述語文では、「ヲ見る」経験をした主体の経験に基づき、その視覚的状況が述べられるが、その述べられた内容は「ヲ見る」経験者にとって事実<sup>4</sup>

<sup>4</sup> 事実については、赤塚(1998:27-31)で、数学的事実に対し、主観的事実とに分け、主観的事実こそが自然言語の研究対象だと述べられているが、本研究も

を報告した内容でなければならない<sup>5</sup>。この場合、出来事時と「見る」認識時は前節の時間関係の分類から見れば、両時点は重なっていないけれども、前節の分類のiiからivに当たるが、出来事が認識時に先立って始まっている、あるいは認識時以降もできごとが継続していても可能なことから、iiiに限定される主観明示用法の「ト思う」の思考方法とは性質を異にする。

次に提案したいことは誰が最も確認可能な位置にあるかという順列設定である。「ヲ見る」述語文の確認可能な談話参加者序列は、以下のように表せる。

主体 = 認識者 [僕] > 聞き手

「見る」主体にこの状況を詳しく述べる知識があり、この順序を不等号の左にあるものが上位にあることを示した。同様の記述を「ト思う」述語文について行くと、思考の主体より確認可能な他の存在が考えられ、次のように図式化できよう。

≥ 主体 = 思考者 [僕]

記号 [≥] とその左側が空白なことは、主体以上に出来事について詳しい情報を所有している存在があり得ることと、この文だけでは聞き手も含めてその存在を特定できないことを示している。そして、主体と同様に誰も知識を持ち得ない場合も考えられ、その場合には主体と同等になり、等号の可能性も含めたのである。

#### 4 「ト思う」述語文に内在する時点について

「ト思う」述語文は、基本的には思考主体にできごとに関する証拠がないことを示したもののだが、アスペクト・テンス形式が異なれば、この構造は異なるものとなる。Iwasaki(1993:23)は例として(17)を挙げている。

(17) その時僕はそう思っていた。

Iwasakiは「ある時点における話し手の考えが間違っていたことを伝える」と直観を述べているが、この解釈を許す原因について「そう思う」という思考時(TP)と、この文の発話時(SP)に時間的推移があるためだと考え、以後、

---

同じ立場に立つ。赤塚では、精神分裂症の女性が「私が女だったらいいのになあ」と発話した場合に、この人の意識の中では、本人は男性で、だからこそ、その発話が成立すると述べ、「Xであることを知っている」(この場合にはX:「私は男性である」)という話し手の心的態度を、主観的事実としている。

<sup>5</sup> 松本(1996)、鈴木(2000)では、メノマエ性という概念を提案している。

思考時を TP、発話時を SP と区別する。このことを図式化したものが、図 1 である。その時点の精神活動内容を記号「:」の右に記す。「↓」は時間的に SP が後のことを示す。

〈図 1〉

TP: [僕] が [そう] と思っている

↓

SP: [僕] が [そう] と思っているコトについて真偽判断を行っている。

(17)では [その時] (TP) の思考内容を偽としている。

思考時 TP と発話時 SP、そして、前節でみた埋め込み節の出来事が表す時点 (以下 ET とする) の 3 つの時点が、「ト思う」述語文には観察でき、3 者の関係を明らかにできれば、「ト思う」述語文の情報構造が明らかにできよう。

## 5 分析

### 5. 1. アスペクト・テンスに関わる問題

「思う」述語文を取り上げた先行研究では、主に「思う」と「思っている」の対立について扱ったものが多いが、大江(1975: 219)は「思う」が主観を表すのに対し、「思っている」は主観の客観化と述べ、中右(1994: 46-52)では「思う」を瞬間的現在時の思考表現とし、「思っている」は持続的現在時の思考表現だとしている。この考えを、思考時と発話時で表す本研究の言い方をすれば、次のように図式化できる。

(18) 彼女がピアノを弾くと思う。 TP=SP ≥ 主体

(19) 彼女がピアノを弾くと思っている。 TP → SP ≥ 主体

この考えは、中右の指摘に通じるもので、思考時と発話時が全く重なるのが「ト思う」であるのに対し、「ト思っている」は発話時以前に思考時が始まったものである。一方、大江の指摘については述べ方の問題であり、6 節で違いを述べるが、聞き手の焦点の当て方に反映され则认为している。しかし、確認可能性の点から見れば、両文共に証拠を持っておらず、同じ機能をもつものとして扱うことになる。

次に、夕形「ト思った」述語文を観察する。

(20) 彼女がピアノを弾くと思った。

この文では、TP と SP にずれがあり、かつ、ET はその間にある。

(20) TP → ET → SP

実例を観察しよう。次の文は甲子園で高校野球の試合を終えた後に、ライト(右翼手)を越えたホームランを打った高校野球球児が述べたコメントである。

(21) 打った瞬間、ライトフライだと思いました。

朝日新聞1996年8月15日 朝刊

〈図2〉

TP (打った瞬間) : [ライトフライだ] と思う

↓

ET (ライトフライが成立せず、ホームランである時点)

↓

SP: TPの思考内容を偽としている

話し手(選手)は、打った瞬間には「ライトフライだ」と思ったのだが、SPではその思考内容を偽と否定している。そこで、この文は2つの主張を行ったものと考えられ、一点は、「ライトフライだと思ったことが偽である」という主張で、もう一点は「ライトフライだ」という思考内容が現実世界で成立しなかったことの報告である。このようにタ形形式では確認可能性の性質をもつが、SPでの話し手の心的態度として、TPを肯定する場合もある。同じく、「思った」というタ形形式の例で、同じ高校野球でホームランを打った(打球がスタンドに入った)選手のコメントである。

(22) 打った瞬間入ったと思った。

朝日新聞1996年8月22日 朝刊

〈図3〉

TP (打った瞬間) : [入った] と思う

↓

ET (打球がスタンドに入った=ホームランの時点)

↓

SP: TPの思考内容を真としている

(22)は(21)とは異なり、「入ったと思ったことが真である」という主張で、もう一点は「入った」ことが現実世界で成立したことを報告したものである。2つの例から、「ト思った」形式は出来事が確認可能で、発話時に思考内容を真、あるいは、偽と判断する。

次に、「ト思う」のアスペクトを変えて、「ト思っていた」を見てみよう。次の例は、アメリカ大リーグの投手「野茂」が球団を解雇された時のコメントである。



- (23) 野茂にとっても、勝負所だが、「望むところだ、いつかはこういう日も来ると思っていた」も、本音に違いない。

日刊スポーツ 1998年5月29日

〈図4〉

TP: [こういう日も来る] と思う

↓

ET (こういう日が来た時点)

↓

SP: [こういう日も来る] という事実確認を経て、TPを真としている

これは、話し手が「こういう日も来る」ことが現実となったことを表明し、かつ、「こういう日も来ると思った」という思考内容を真とした例である。

以上、タ形形式を分析したが、タ形形式の本質は「思う」という思考が終結することを表す。言い換えれば、確認が可能になったために思考から解放されると考えられるのである。この性質は否定を含んだ「ト思わなかった」の場合にも該当するが、この場合には思考行為の否定ではなく、思考時の思考内容を否定することになる。実例をあげよう。

- (24) 開業をしてみても吟子は今更のように婦人に花柳病が多いのに驚いた。相手が女性だということで、今まで耐えていた女達が一斉に押し寄せた故もある。それにしてもこうまで多いとは思わなかった。

田辺聖子「新源氏物語」: 463

〈図5〉

TP: [花柳病がこうまで多い] とは思わない

↓

ET (花柳病がこうまで多い時点)

↓

SP: TPの思考内容を否定している

発話時と思考時の間に出来事時がある構造は肯定文のタ形と共通だが、出来事を確認できた結果、発話時に思考時の思考内容を否定することは、述部が肯定の場合と異なっている。

以上の論をまとめると、一人称主体が「ト思う」主体で、かつ話し手の場合にはタ形では思考内容についての確認ができ、言い換えれば、話し手は思考時になかった知識や情報を得ているのである。「ト思った」「ト思っていた」の両者はTPの思考内容を真とも偽とも判断できるが、特に「ト思わなかった」につ

いては、TPの思考内容を偽と判断する過程をとる。では、なぜタ形と結びつくところした解釈が可能になるかについて考えたい。それは「思う」という動詞に内在するアスペクト的意味に拠り、リーチ(1976:42)を援用すると、認識を表す動詞は「積極的な心的活動を意味している」のだが、「思った」「思っていた」「思わなかった」のようなタ形の完了を表す形になると、そうした心的活動は完了したもので、現在とはつながっていないものとなるからだと考えられる。そのため、以前の思考内容について判断できるのである。

ここまでの分析を表にまとめたい。今までに取り上げた文は、一人称文であるので、「ト思う」主体とこの文の話し手は同一であるため、[主体=話し手]と定義できる。そして、2つの時点、TPとSPの時間的な関係で、両者が同一である場合は [=]、TPにSPが後続している場合は [→] で示し、TPとSPのそれぞれの時点において、出来事に対して確認が可能な場合を [+], 不可能な場合には [-] と表記し、その際の例文を横に並べた。

主体=話し手	TP = SP		
	-		僕は彼女がピアノを弾くと思う
	TP → SP		
	-	+真 or 偽	僕は彼女がピアノを弾くと思った 僕は彼女がピアノを弾くと思っていた
+常に偽		僕は彼女がピアノを弾くとは思わなかった	

〈表2〉主体と話し手が同一である場合の確認可能性

## 5. 2. 人称に関わる問題

TPとSPに分けることが、有効な分析方法であることは「思う」主体が3人称の(25)の例でも説明可能である。

(25) 彼は彼女がピアノを弾くと思っている。

TPの主体は「彼」であり、話し手は思考時には関与していない。一方、発話時には思考の主体である「彼」は関与せず、話し手のみが関わっているのである。この文機能を考えると、思考主体の彼の思考内容を、話し手が報告したものである。これを確認可能性の観点から述べると、確認可能なものは彼が思考していること自体である。そのため、思考内容、つまり埋め込み節の表わす出来事については真か偽か判断できない。この情報構造を示すと、ETは前節までのように、TPとSPの間になく、異なる時間にある。

〈図6〉

TP: [彼] が [彼女がピアノを弾く] と思う

↓

SP: [彼] が [彼女がピアノを弾く] と思っていることを、話し手が情報として所有している。

≠

ET (彼女がピアノを弾く時点)

実例を観察するが、(25)とは異なり、この例は話し手が主体「釣り好きの人間」の思考内容を否定したものである。

(26) 釣り好きの人間は、水の中に動くものがあれば魚だと思ってしまう。

濱野恵一「脳とテレパシー」:44

この文が否定を表わす理由はテシマウ形を用いることで、「ト思う」という思考行為に話し手の主観的判断が加わっているからである。この文の情報構造は次のように記せる。

〈図7〉

TP: [釣り好きの人間] が、[水の中に動くものがあれば魚だ] と思うこと

↓

SP: [釣り好きの人間] が [水の中に動くものがあれば魚だ] と思っていることを、話し手が情報として所有し、テシマウ形を用いることで、[釣り好きの人間] の思考内容に主観的判断を加えている。

そもそも他人の精神活動を理解することは不可能だが、表面的に第三者の思考内容を言語化できる理由として、情報構造的に「TP→SP」の流れを持つことで、第3者の思考行為、及び思考内容を話し手が情報として獲得しているからと考えられる。

### 5. 3. 否定の問題

次の兩文は彼女がピアノを弾くことについて、話し手が判断を述べたものだが、現実の談話では同じ状況で使用されることもある。

(27) 彼女はピアノを弾かないと思う。 TP=SP ≥ 話し手

(28) 彼女がピアノを弾くとは思わない。 TP→=SP ≥ 話し手

形式的な違いとして、「ト思う」の否定された文(28)には、通常、動詞の前に「は」が挿入され、情報構造的違いとしては、(27)がTPとSPが同時で、かつ瞬間的現在時の思考であるのに対し、(28)は「ト思わない」というナイ形式

を持つため、状態性に解釈できる。つまり、(28)は(27)と異なり瞬間的とは言いがた、TPに長さが認められるのである。(27)では思考内容自体に否定が含まれているが、(28)は思考行為自体を否定していると考えられるが、(28)のように思考行為を否定するためには、思考内容が先立って意識化されていなければならず、このこともTPがSPに先行している証拠となる。このことは語用論レベル上では、前提として扱われてきたが、詳細は6節で述べる。

主体=話し手	TP = SP		
	-		僕は彼女がピアノを弾かないと思う
	TP→=SP		
	-	-	僕は彼女がピアノを弾くとは思わない

〈表3〉主体と話し手が同じ場合の否定を含んだ2つの文の情報構造

## 6 対話における焦点構造

前節までのテンス・アスペクト、人称、否定の分析から、TPとSPの時間的相対関係を見たが、「ト思う」のル形のみが、他の形式とは異なって、TPとSPが同時点であることが明らかになった。この分析結果は、澤田(1993: 173)の直感も説明可能である。澤田では、以下の4つの文について、次のように述べている。

- (29) A: 私は [トムが真犯人だと] 思う。  
B: 本当ですか?
- (30) A: 私は (いまでも) [トムが真犯人だと] 思っている。  
B: 本当ですか?
- (31) A: 私は (一瞬) [トムが真犯人だと] 思った。  
B: 本当ですか?
- (32) A: 私は (ずっと) [トムが真犯人だと] 思っていた。  
B: 本当ですか?

澤田は、「(29)の「本当ですか」は「トムが真犯人であるかどうか」が問われたもので、(30)から(32)では「思っている／思った／思っていたかどうか」が問われているように感じられる」と言語直感を述べている。以上に加えて、本研究で扱った否定と人称の異なる文も同じテストを試みよう。

- (33) A: 私は [トムが真犯人だと] 思わない。  
B: 本当ですか?

(34) A：彼は「トムが真犯人だと」思っている。

B：本当ですか？

筆者の直感では両文とも(30)から(32)までと同じく、「思う」行為についての質問だと感じる。この違いを生じさせる要因は、(29)のみがTPとSPが同時であるの対して、それ以外はTPとSPが離れていることにある。そこで、次の聞き手の原則を考えたい。

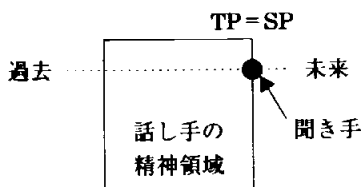
### 【聞き手の原則】

話し手の提供する情報構造において、聞き手は時間軸上の最も現在時に近い時点に焦点を当てる

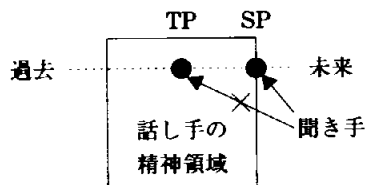
つまり、TPとSPが同時である(29)では、聞き手はTPに焦点を当てられるのだが、(30)から(34)はSPに焦点を当てて、思考内容については触れていないのである。この構造を示したものが、〈図8〉である。

〈図8〉「本当ですか」テストのTP/SPに対する聞き手の焦点の当て方

(29)の構造



(30)から(34)の構造



本研究ではこの現象を次のように説明したい。聞き手[B]にとっては、(29)は思考内容の真偽についての疑問で、確認可能な主体がだれかを疑問にしている。ところが、(30)から(34)は話し手[A]に知識があることを踏まえての疑問を述べており、埋め込み節の表わす内容を前提として聞き手は理解しているのである。このことを話し手[A]の側から述べれば、(29)は出来事に対して確認不可能なことを表明しているのだが、タ形やテイル形のようにアスペクトが変わることで話し手は確認を済まし、報告文として文を伝えているのである。

6 「本当ですか」のテストで、(29)でも思考行為を尋ねる解釈が取れるとしても、それはTPとSPが同時であるためである。しかし、それ以外の文では思考内容を尋ねる解釈はできない。

## 7 まとめ

「ト思う」述語文について、確認可能性という認識に関わるレベルと、焦点という談話レベルから文機能を見た。基本的に思考者に出来事についての十分な知識がないために、「ト思う」が用いられているのだが、テイル形のアスペクト、主体の人称、そして否定化など、文形式が変われば、文機能も変わる原因を、TPとSPの観点から証明したのである。本稿の結論に以下にまとめられる。

**結論** 「ト思う」は、認識レベルとして主体のできごとに対する確認不可能な心的態度を述べたもので、その成立条件はETとTPが一致しない場合である。しかし、発話時点でTP→SPの関係がある場合に、話し手は確認が可能となり文機能が変わる。その結果、談話レベルでは、聞き手は話し手の思考内容を前提化する。

### 参考文献

- 赤塚紀子(1998)『モダリティと発話行為』, 中右実編, 『日英語比較選書3』, 研究社出版: 27-31
- 大江三郎(1975)『日英語の比較研究 主観性をめぐって』南雲堂: 219
- 小野正樹(2000a)「埋め込み節をとる動詞について」, 『筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究報告 平成11年度Ⅲ』, 筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究組織: 129-138
- (2000b)「ポライトネスからみた「ト思う」について ——一人の作家の対談分析を通じて——」, 西武文理大学サービス経営学部研究紀要 創刊号
- (2000c)「「ト思う」と「ト思っている」について」, 『現代日本語彙・文法研究』, くろしお出版 (近刊)
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』, ひつじ書房: 44
- 定延利之・熊谷吉治・蒔田修司(1999)「新情報と旧情報」, 『文法と音声2』, 音声文法研究会, くろしお出版
- 澤田治美(1993)「視点と主観性—日英語助動詞の分析—」, ひつじ書房: 173
- 鈴木泰(2000)「メノマエ性」, 『日本語学 新・文法用語入門』, Vol. 194月臨時増刊号, 明治書院

- 中右実(1994)「認知意味論の原理」大修館書店：46-52
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』, ひつじ書房：79,222
- 益岡隆志(1997)「表現の主観性」, 田窪行則編『視点と言語行動』, くろしお出版：1-2
- 松本泰丈(1996)「奄美大島方言のメノマエ性—龍郷町瀬留—」, 『日本語文法の諸問題』, ひつじ書房
- 森山卓郎(1992)「文末思考動詞「思う」をめぐる一文の意味としての主観性・客観性—」, 『日本語学』Vol. 11, 明治書院
- (1995)「ト思う, ハズダ, ニチガイナイ, ダロウ, 副詞~φ」, 『日本語類義表現の文法(上)単文編』, 宮島達夫 仁田義雄編, くろしお出版
- リーチ G. N. (1976)「意味と英語動詞」, 國廣哲彌訳注, 大修館書店
- Chafe, Wallace (1994) *Discourse, consciousness, and time: the flow and displacement of conscious experience in speaking and writing*, University of Chicago Press
- Iwasaki, Shoichi (1993) *Subjectivity in Grammar and Discourse* John Benjamins Publishing Company Amsterdam / Philadelphia

## データ

- 朝日新聞1996年8月15日朝刊, 8月22日朝刊,  
日刊スポーツ インターネット版1998年5月29日
- 田辺聖子『新源氏物語』, 新潮文庫の100冊, CD-ROM版 1995/12出版
- 濱野恵一「脳とテレビ—あなたの脳には巨大な力が潜んでいる」河出書房新社  
1996年6月出版

本稿は日本言語学会第118回大会(1999年6月20日 東京都立大学)での口頭発表に基づいている。菊地康人氏, 本多真希子氏をはじめ, 多くの方からコメントをいただきましたことに, 御礼申し上げます。